

六花  
6



2019

りっかはいくかい

山田六甲

頭智州作山津山勝

鎮

悼 真田修予君 身寄りもなければ二句

卒業の自転車遠出せしことも  
花櫛はなしぼや水は天からもらひたまへ  
春の炉の味噌汁の炭つぎにけり  
木琴のやうな橋なり滝仰ぐ  
川床や智頭十方の水の風  
沢の奥その奥の奥二輪草  
かまど飯炊いて蕨の客を待つ  
はた織の縁側に差す緑かな  
奥方は姫竹の子を折りにけり  
春の炉や月へ帰らぬ姫ここに  
山繭や織りかけの帯美しく  
沢の橋鍵掛けてあり座禅草  
沢水の光たばしる即位の日

山吹の影 宝篋印塔ほうきょういんとうに  
へうたんに彫りし川柳とは薄暑  
緑さす高田硯を指なぞり  
因幡から吹き来る茅花流しかな  
つばめの巢津山信用金庫かな  
竹の吐く水にラムネを冷やしけり  
高瀬舟発着場跡上り鮎  
クルス染め抜き教会の夏のれん  
谷崎の疎開日記や夏つばめ  
谷崎も荷風もここに夏暖簾  
勝山や灼けし袋に太る桃  
麦秋の勝山うどん歯が立たず

悼 山本ミツ子様

蛭はうたるのあとを追ひたる蛭かな

雪嶺抄

たゝみ

笹村 政子

鶯や夫亡き畳拭きをれば  
山越えて母の来てゐる朧かな  
学舎の城見ゆる町卒業す  
謝恩会恩師の踊る安来節  
約束の卒業旅行のお供かな  
南国に孫と遊べり汐まねき  
三線を抱かせてもらふ春の宵  
春浅き路上ライブの少女かな  
天を突く光となれり松の芯  
春疾風わだち啄む番鳥

虫出しの雷明け方に一度きり  
どの木にも分けへだてなく芽吹き風  
枝交し芽吹き急ぐ木いそがぬ木  
末黒野に焦げてごろごろ石のこる  
欠航を知らず貼紙俊寛忌  
野兔の排泄ころがりて山笑ふ  
鳥雲に看取り足らざることの悔ひ  
スカーフの端もてあそぶ春の風  
詰めすぎし息にゆがみてしゃぼん玉  
見るだけの雛の売り場を行き戻り

# 絡みあふ梅花の天を離る鳶

善野 行

倒木の切口に洞春浅し  
絡みあふ梅花の天を離る鳶  
日溜りに人目を奪ふ木瓜の花  
あの母もこの子もここに卒業す  
一切は手探りの明日卒業す  
枝ぶりの鋭き影現るる春障子  
明け方の雨聴きすます二月尽  
うららかや瀬音に弾む日の礫

からみあうばいかのてんをさからるとび ぜんのごう

天（あま）離（さか）る、とくれば、柿本人麻呂の「天離、夷之長道従、戀來者、自明門、倭嶋所見」で「天離る、鄙（ひなの長道（ながち）ゆ、恋ひ来れば、明石の門（と）より、大和島（やまとしま）見ゆ」を思い起こす。天離るは「鄙」の枕詞。天のかなた、都から遠く離れている意。掲句は梅の咲く空を鳶が飛び離れて行つたよ、という意味で、鳶の能動的な意志をも捉えている。こんなに見事な梅を、鳶よお前はうるさく絡み合う梅にはもう飽きたのだからか、と呼び掛けているのだろう。俳句（文芸）には審美言（眼）が必要で、「絡みあふ」という俗な表現を下七五で包み込み格調高く詠んだ、読後の清々しさを与えてくれる。

雪卿集 せつけいしゅう

志方 章子

升田ヤス子

冬の梅影のはみ出す水溜り  
寺跡と書かれし囲ひ桜の芽  
花ちやんと言ふは老犬春めけり  
卒業や手を振つてやる塀の猫  
進むべき道見つからず卒業す  
卒業の君送り出す朝かな  
桃の花咲くコンビニのバケツかな  
梅林に迷ひて友を呼びにけり

後ろから父のしはぶき卒業式  
卒業や校歌の山に登りもし  
惜春の少し褪せたる押花絵  
杉山や千筋の日矢の花三楹  
柵に寄る仔馬のまつげ風光る  
いかなごの光る糶場せりの流し水  
はくれんの輪郭翳るとのぐもり  
緑さす仏師の手元子の見つめ

出口 誠

永田万年青

春の朝勇気が背中押してをり  
もらひ泣き伝播してくる卒業式  
むらさきの群れを作りてすみれかな  
日暮れまで校庭にぬし卒業子  
春の昼我に呼びかけからず鳴く  
陽炎に母の手はらひ駆けゆく子  
雪柳三十センチほどの白  
陽炎に入りたる友を呼びにけり  
お屋敷にピアノのひびく春の昼  
春光に手振り身振りの二人かな  
隣人にケーキをもらふ卒業児  
春光を浴びて集へるベビーカー  
ハイタッチして別れゆく春の宵  
春泥の付きしおしぼり椅子にあり  
子二人の待つ家目指す春の宵  
囀りや首振り見上ぐ通行人



藤生不二男

住田千代子

近寄れば 岸边離るる 春の鴨  
連翹れんぎょうの水田に影を落としけり  
さざ波にかくるるほどの蘆の角  
一枚の水の張られし春田かな  
中空の落つるにまかす雲雀かな  
行く鴨の滑走の脚たたみけり  
刻すでに春の夕焼となりにけり  
三極の花の灯れる日暮かな

雪だるま目鼻のなきが柔和なり  
取敢へず椅子に掛け置くコートかな  
荒畑をつなぐ齋なすなの花ざかり  
切り花の包み解きある雛の日  
呉線の窓の片がは竹の秋  
トランプを棺に春を惜しみけり  
乗り換への電車待ちある春の夕  
春雷を聞いて再び寝落ちけり

善野 行

谷口 一献

倒木の切口に洞春浅し  
絡みあふ梅花の天を離る鳶  
日溜りに人目を奪ふ木瓜の花  
あの母もこの子もここに卒業す  
一切は手探りの明日卒業す  
枝ぶりの鋭き影現るる春障子  
明け方の雨聴きすます二月尽  
うららかや瀬音に弾む日の礫

卒業式一番泣いてゐる先生  
鳥の声は気の所為ならむ春うらら  
辛夷咲く雨の綺麗に上がりけり  
剪定の音小さくなる遅日かな  
花冷の半月過ぎし部屋整理  
ちくちくとカーテン抜ける春の色  
うららかや腑抜けの如き日曜日  
千鳥足軽く捌きて春の宵

# 雪樹集

廣畑 育子

平居 滯子

長き尾に枯葉絡ませ馬車行けり

子のメール交互にくれて寒明ける

何がしの根方が似合ふ黄水仙

青き踏む鹿の鼻先躲しつつ

コサージュや老人大学卒業式

どの道を行きても梅の奈良匂ふ

芽吹く桜枝の黒々と夜の雨

茎立ちを見届けてより掘りあげぬ

山茱萸の焼板塀に黄を凝らす

梅散らし風の姿を露にす

紋白蝶背なにふと来て消えにけり

春鴨の水脈離れつつ交差しぬ

赤松 赤彦

延川五十昭

北窓を開き光を浴びてをり

陽炎や猫の匂ひのする糶り場

菜の花やお足不如意な漢たち

かぎろひの御代新しき菜花かな

かげろひて十数年をひとりの身

陽炎へる昭和名残の商店街

陽炎の中より現れし漁網かな

陽炎へる競りのをはりし漁港かな

陽炎や飯屋看板逆さなり

鉤屑散らかる庭の陽炎へる

垂水港ポンポン船のかげろうて

鍵盤の光の中に卒園す

延川 笙子

大内 幸子

托鉢に水陽炎の立ちにけり

畑毎に春動き出す人の影

陽炎のゆらぎに見とれ眠りけり

野面積空家の角の露の臺

大漁旗かぎろひに止む網打場

母植ゑし記念の椿軒越して

春雨の水烟となる丹波かな

休耕の畦を伝ひて芹を摘む

歌よみの曾孫の造る雛の酒

一雨の辛夷見上げて昼の月

春浅し虚子は銘酒の名づけ親

朝夕の心経唱へ彼岸かな

江見 巖

田尻 勝子

春泥や足の先よりフラミンゴ

ふと君が現れてゐて花の下

薄氷やこなごなに顔潰したる

椿落つメタセコイヤの森の中

逃水や追ひつくことのなき女

救急のサイレン激し春嵐

木簡の田より出てくる建国日

かげろふを纏ひて現れる列車かな

畦焼や休むことなき煽らるる

雑踏の隙間に落つる牡丹雪

苗札や隠したままの花言葉

春愁ウイスキーもて口濯ぐ

りっかしゅう  
六花集



6月到着順

菊谷 潔

雨は雪に目まぐるしさにきざす春  
風色や梅数輪の事ながら  
梅が香や春さだまらぬあはきゆき  
香に香や鼻をくぐりて花を見る  
閑さや梅満開の日の夕べ

磯野青之里

そもそもは鳥の糞から実万両  
立春の陽の匂ひなり悉く  
裏道の余寒が足にからみつく  
同じ風受けて麦踏む父子かな  
うりずんや東シナ海基地の島

螢雪譚 山田六甲



畑毎に春動き出す人の影  
大内 幸子

春の息吹は畑一枚ごとに春の到来に  
農耕に動き出した、と活気ある農村の  
姿を詠んだ。冬場ひっそりとしていた  
畑に出て農作業が活発になって来た歓  
びの歌である。

托鉢に水陽炎の立ちにけり  
延川 笙子

托鉢とは仏教僧が経文を称えながら  
鉢を持つて人家を回り食べ物を乞うこ  
とで、乞食（こつじき）とも言う。そ  
の托鉢僧がゆらゆらと陽炎に揺れて、  
腰から下が水のようになっている。水  
陽炎は逃げ水とも言い、近づけば次第  
に逃げてゆくように見える。六甲に「逃  
げ水の果は代田の近江富士」というの  
がある。

春泥や足の先よりフラミンゴ  
江見 巖

動物園での作であろう。フラミンゴ  
の美しい朱鷺色の足先まで春泥で汚れ  
ているのを詠んだ。足の先よりとい  
うのは足が汚れてその足で羽を掻き徐々  
に体が泥に汚れて来たのだろう。とこ  
ろでフラミンゴの綺麗な朱鷺色は赤い  
餌を食べているからだそう、鶏にも  
赤い色素を持つ餌をやれば赤い卵を産  
むそうである。江見は赤い物をずっと  
見ていると、目が赤くなる？。